

問題提起「教授学の観点から」

田中 耕治（京都大学大学院教育学研究科・助教授）

ご紹介に預かりました田中でございます。ちょうど京都大学に赴任しまして2年目になります。現在、教育方法学講座というところにおりまして、かなり実践的な学問をしています。前におりました教員養成系の大学と比べまして、教育方法という学問をやっておりますも、特に京都大学では非常に肩身が狭いというんでしょうか、そんなことをやっているのかという雰囲気がありまして、この2年間やや悶々としていました。しかし、今日このフォーラムに出していただきまして、「あっ、この場が教育方法の場だった」と改めて感じまして、おそらくそういう配慮もあって、田中毎実先生が僕をここに呼ばれたんだろうというふうに思いました。他の3人の先生方はこの間このセンターに、参観者、または共同研究者として関わっておられたと思うんですけども、実は僕は初めてここに来まして、いろいろなお話をうかがったわけでありまして、稲垣先生の最初のお話をお聞きしますと、もうほとんど言い尽くされていると言いましょか、僕の言うことはほとんどないというふうに思った次第です。また、今米谷先生や山地先生がすごくいいプレゼンテーションをされまして、実はこういうことを言っていていかどうか、目の前に総長がおられますのであえて言いますが、教育方法の研究室に赴任しましたら、まだそこにはビデオがなかったんですよ、2年前に。そこでビデオぐらい買おうという話をして出発したような状況で、ましてやこのようなプレゼンテーションができるわけありませんので、とりあえずレジメとしては4枚くらい刷ってきたわけです。そんなわけで、教育方法をやっております少し若手の立場からお話をさせていただきたいと思っております。

まず、稲垣先生もある著作の中で、「当事者」になるといいますか、当事者として教育を語るということが大切だということをおっしゃっておられまして、たしかに我々教育に関わっております者は、自分を抜きにして語れないというところがありますので、今日は少し自分のやってきたことを振り返りながら、何か参考になるお話ができればというふうに思っています。

まず、僕は今「教育方法」なんていうことを申しましたけれども、本日のプログラムでは「教授学の観点から」という名前がついているんですね。教授学とは何かということですが、この間ある小学校の先生と話をしていましたら、「教授学とは教授になるための学問ですか」と言われまして、「いや、そうではないんだ」と。確かに最近あまり「教授学」という言葉が使われなくなりました。ちょっと固くて窮屈な言葉で、そういうふうにご理解されるのもわかるし、またそういう類の本も最近たくさん出ていますよね。大学教師になる方法とか出ていますので、教授学といえますと教授になるための学問かと。よく考えてみると、言い得て妙ですね。ここではまず、教授学とは、「教える技術に関する学問」ぐらいにとらえていただければいいと思います。これには本当に長い学問の歴史がありまして、このことを語りますと、稲垣先生の前ですから馬脚が出ますので、とりあえず、「教えるための技術の学問」だとおさえただければよいと思います。こんなことを「教授学」はやっております。最近では教育方法学と言った方が通りがいいので、教育方法学というような言い方をしております。

それで、こういう学問をしておりますと、当然大学の授業には関心があるんだろう、大学の授業を語る最適者じゃないかと、こういうふうに思われる方が多いと思うんですね。おそらく、毎実先生もそのような「幻想」をもって、僕をお呼びになったんじゃないかと思うんですけども。しかしながら、教育方法学を大学で教えるということは因果な仕事だということを、大学の教壇に立ちましてからつくづく思っているわけです。先ほど映像の中で毎実先生が板書をされてましたね。なかなか大胆な板書をされてました。我々教育方法をやります者は、「板書法」を教えないといけない。板書はできるだけ丁寧に、きれいに、わかるように、色もきちんとわけて、こんなことを教えております。それをまあどうでしょう、書き殴ったような板書でしておりますと、自分は何をしてるんだろうなと考え込まざるをえない。そういうことがあります。また、先ほど山地先生が「動機の問題」をおっしゃってましたけれども、我々教育方法学の方でも学習意欲の話をいたします。「どうしたら子どもたちに学習意欲をわかせるような授業ができるか」という話をしております時に、学生が居眠りを始めたり、頬づえをつかれたり、これも退屈な頬づえをつか

れたりされますと、本当にどう言うんでしょうか、悲劇というよりも一種の喜劇といいたいでしょうか、俺は何をやってるんだろうかという思いにかられます。ただやや開き直りまして、あくまでも自分は小学校、中学校用の教育方法を教えているのであって、自らが上手い授業をやるなんて思わなくていいんじゃないかというふうに思って、何とか自分の精神状態を安定させて、この因果な教育方法学という学問を学生に教えていました。そういう時期がやや長く続いたわけなんです。しかしその時期においても、「何かしないとイケないな」ということをいろいろと書いておまして、それについてすこし考えたこともあるんですけども、それはまた後でお話をしたいと思います。

そういう迷いの中で、一番決定的にというんでしょうか、自分の大学の授業に関わっていく姿勢を問われたというのは、先ほどもご紹介いただきましたけれども、ちょうど8年くらい前なんですけれども、兵庫教育大学に赴任したことです。ご承知の方もおられると思うんですけど、現職の先生が2年間にわたってそこで研究をされるということで、ちょうど稲垣先生の滋賀大学での経験とよく似た経験なんですけれども、2年間現職の先生たちと寝食を共にするというんでしょうか、そういう形で8年間を過ごしてきたんです。主に小学校と中学校の先生たちなんです。ある意味では教えるプロだと言ってもいいと思います。その人たちに教育方法を教えないとイケない。わかっていただけますでしょうか。本当につらい立場です。最初の2年間くらいは、講義をする前日はなかなか眠れなかったというか、すごく緊張いたしました。と言いますのは、講義をやりますと、いろいろコメントが返ってきます。例えば僕の授業は「都はるみの授業」だと言うんですね。何でもかとも聞きましたら、階段教室で200人くらいの授業でしたが、すごくサービス精神が旺盛だったんでしょうか、右に向かって喋って、左に向かって喋ってうろろうしたものですから、「あなたの授業は都はるみのような授業だ」というような評価を受けました。次に板書の癖ですね。細かく言うてくるんです。先生の板書はこういう癖があるんだとか。話し方もそうです。今よりも少し若くて、自信がなかったものですから、「この話は次にする」、「この話は次にする」とついつい言うてしまうんですね。「先生はいつでも次にすると言って、これはいつしてくれるんだ」とそういう話の癖まで、本当にこと細かくチェックをされまして、ある意味では鍛えられたわけですが、つらい思いをしたわけですね。

まあ、そういう経験をする中で、現場の先生方が持っているある種の雰囲気とか、先生方が持っている教師文化みたいなものとかかなり親しくなりました。しかしながら、ただ一点というんでしょうか、非常に違和感を感じたのは、「現場」という言葉なんです。ここにも小学校、中学校、高校の先生もおみえだと思ってしまうんですけども、我々、大学で研究をしている者とディスカッションをしますと、最初は仲良くやっていますが、お互いにエスカレートしてきますと、小学校、中学校の先生は特にそうなんですけれども、「現場では」と言い出すんですね。これはどういう意味かと言いますと、「大学の先生たち、良いことを言うけれども、あなたたち現場を知らないでしょう」ということが、いわずもがなで、ニュアンスされている言葉なんです。そういう言葉が出ますと、僕たちも構えまして、あまり次の言葉が出ないという、そういう経験をしたんです。何とかそれを克服しないとイケないなと思っていて、ある時、そうだ「僕も現場にいます」と。「大学という現場に僕もいるんです」という、そういう言い方で、ある種の壁になっていた「現場」という言葉を、自分なりに受けとめていくことになります。もっと平たい言い方をすると、先生たちが手塩にかけて育ててこられた生徒たちがまさに大学にいるわけですから、それを教えているということは、まさに「現場」そのものであるという、そういう自覚のもとに、やっぱり自分たちの大学での実践を点検していかななくてはならないのではと思うようになったわけですね。

それで、大学の授業というものを「現場」として捉えるという形で考えるようになったわけですね。しかしながら、この発想は、どうも教育学者の発想じゃないかというふうに一方では思っていたんです。他の学問をやる人たちは授業をどうするかとか、どう考えるかというのは、これはある種のバイプロダクトぐらいの位置づけと思われておるのではないかな。そこの論理をどういうふうに考えたらいいのかなということを一方向で思っていたんです。このような中で、大学授業を改善するための意識改革というものを考える時に、実は自分が教えている教授学の性格そのものをどう捉え直すかということと、実はかなり密接に関係しているのではないかと考えるようになりました。

先ほど総長もおっしゃいましたように、大学の授業を変えるとか、実は自分も大学実践を行っているんだというふうに考えることは、まだ大学の先生の中になんかの抵抗がある、と僕は思っております。このフォーラムにお集まりの先生方はむしろそういうことを乗り越えておられると思うんですけども、一般的には、だいたい俺の授業を理解できないのは学生が悪いんだと考えておられる方が多いと思います。そして、理解できないのが学生の責任だという

ことは、同時に最近の大学生の学力低下という問題とも重なって、だから俺の授業はなかなか上手くいかないんだと。こういう論理にも容易につながっていて、大学授業の改善というものを進めていくための意識の遅れを助長しているように思います。

しかし、そうはいつでも、いろいろな人が今、大学生の学力低下の問題というのが避けがたくおこってきていると指摘しはじめています。僕は学力の実態には三つぐらいの指標で考えた方がいいのではと思っています。

ひとつは、「学力の水準」が高いか低いかに問題です。今問題になっているのは、おそらく学力水準の問題がかなりクローズアップされていると思うんですね。ご存知だと思うんですが、『週刊朝日』の今年の3月26日付でしたでしょうか、大変にセンセーショナルに東大生、京大生の「学力崩壊」を記事にしています。そこでは、数学の学力が落ちているんだということを中心に実証的に示していきまして、そういう問題があります。二つ目は、「学力の格差」というのでしょうか、全員が皆悪いのかどうかという問題です。そうではなくて、かなり格差がひろがっているということも、一方ではあるのではないかと考えております。さらに三つ目として、実はこれが一番本質だと思うんですが、「学力の構造」の問題です。水準が高いかどうかという問題は、おそらく構造、つまり学力の質といいたいでしょうか、わかり方とかでき方と呼ばれているレベルですね。そういうところに大きな問題があるように思います。この学力の構造の問題は、後で例をあげてお話ししたいと思います。

こういうふうな学力問題が浮上してくる中で、どうしても授業を改善せざるを得なくなってきたというのが現実であると思います。そして、そこには僕は三つぐらいの対応があるのではないかと考えています。この対応の問題は他人事のように言いますが、実は自分なりの反省をこめております。ひとつは、学力が低くなったんだからということで、それを自明の前提にして、ある種講義を「娯楽化」するといいますが、そういうふうなやり方があるように思います。このように指摘しますと「そんなことはない」と反発される先生が多いんですけども、実際のところはあるんですね。こんなことを学生に言ってもわからないから、この程度でとどめておこうとか。こういう話題を出しておけば、とりあえずこの時間は楽しく面白く講義が進むんじゃないかという形で授業が行われる。こういう傾向があるように思います。しかしこのあり方は、厳しく申しあげますと大学教育そのものの否定にも当然つながっていくわけです。

このような対応ではなくて、自分が教えようとする講義を、教育方法的な知見をも取り入れてなんとか改善しようという動きがでてきています。これは非常に力強い動きだと思うんですけども、その場合にも、次に申しあげますように二つの対応があるように思います。この二つの対応のちがいは、教授学そのものの捉え方にも関係しているように思います。教授学と言いますと、ある正解があって、それをどう学生に効率的に教えるのか、そのために様々な工夫をするのが教授学だと、こういう発想がありますね。これも僕は一面あると思うんですけども、そういう形でのみ教授学の成果を取り入れて授業改善をしますと、ある種技術主義的な偏向を生むんじゃないかと考えています。これは先ほど講義の「娯楽化」という言い方をしましたけれども、最終的にはその傾向とあまり変わらなくなるという問題があると思っています。

そこで、より本質的に教授学を捉え直すという観点から言いますと、ある学問をできるだけやさしくかみ砕いて教えるというわけですけども、実はそのことを通じて、自分たちが教えようとしている文化や学問それ自体のあり方や方法を問い直すような、そういう契機を含んでいるのが本来の教授学のあり方ではないかというふうに思っています。具体例をあげてみます。ここに僕が持ってきましたのは、廣川洋一先生という方が書かれた『プラトンの学園アカデメイア』（岩波書店）という本で、非常にアカデミックな本ではあるんですけども、すごく僕は面白く読みました。この面白さの理由が「あとがき」に書いてあります。先生によりますと、自分はギリシャのアカデメイアのことを学生に教えていたとおっしゃるんですね。そのために当時のいろいろな先行研究をみたんだけど、またそれを読んで教えたんだけど、なかなか学生は理解してくれない。そこで、アカデメイアの実態に迫るような研究をしないと、学生に本当に納得した形でわかってもらえないということが理解できたということで、それをふまえた形でこの本が書かれたということです。そのために、当時のアカデメイアの実相というものが、非常にクリアにわかる本になっています。まさしく授業・講義の中で、こういう研究上の発展が生み出されたということで、すごく面白く読みました。こういう例は多々あると思うんですね。

僕が経験した身近な例で言いますと、最初に赴任した大学には、講義室にいわゆるビデオのプロジェクターの装置

がありませんでした。なんとかプロジェクターをつけて欲しいということで、当時の理事長と直接やり合ったんですけども、「講義でビデオを使うとは何事か」と言われたんですね。「こんなことをやれば遊びになる」と。「だいたい映像で何を教えるんだ」とおっしゃったんです。その時に僕はこのような説明をしました。確かにビデオを使うということは、自分の教えようとするのをわかりやすく伝えようとしていることではあるけれども、ビデオを使って「授業の場面」を学生に示して教えるということは、実は教授学という学問の持っている性格が変わってきているということ。今までの、教授学といいますと、「教授の原則」がざあっとテキストに並んでいまして、それを教えていたんです。そうではなくて、稲垣先生が指摘されましたけれども、まさにケースメソッドですよ。ひとつの事例をどう分析するかということによって、教育方法なり教授学を新しく立ちあげていくためには、やはりビデオを使って整理しないと整理しきれないという問題が実はあるんだということです。以上のように教育方法なりで行っている様々な工夫というのは、自分たちの学問の捉え方とつながっているんだということまでいかないと、なかなか大学の先生が自分の授業を変えていくということに結びついていかないのではないかなと思うようになりました。ぜひ、今言いましたような観点から講義や授業を見直す必要がありますし、この観点が生きている成果を蓄積していかなければならないだろうと思っています。

それではおまえの考えている教授学、教育方法学というのは、「文化を問い直す」とか、「文化を問う仕掛け」とかと言っているけれども、具体的にはどういうことを考えているのかということになります。どうも稲垣先生を前にこういうことを言うのは非常につらくて、恥ずかしい限りなんですけれども、例えば教授学の基本問題ということで次のように考えています。これは主に小学校から中学校の先生たちの中での教育方法なり教授学の成果であると考えていただいていると思います。ひとつは「よい授業の条件とは何か」ということです。前任校で現職の教員を教えたということを言いましたけれども、その先生方に僕はいつもどういう授業がよい授業と思うのかというアンケートをしていました。それを整理しますとだいたい三つになったんです。ひとつは、「授業に共通のめあてがあり、わかった・できたという喜びがあり、それを励ますクラス集団がいること」です。これは学習集団の中で授業が行われているんだという点を強調しているわけです。集団の、先ほどコミュニケーションという話も出ましたけれども、それをどう使って授業を行うかということがひとつの問題だろうと思います。二つ目は、やはりこれは当然ですけども、「子どもたちが自分たちの生活・学習経験を総動員できる授業であること」です。三つ目は、「子どもたちが今まで持っていた、ものの見方・考え方・行動の仕方を変革する授業であること」です。こういうものがおそらく授業のいい条件というふうに現場の先生は思っているだろうと思います。

これを教授学の課題として引きとりますと、だいたい6点ぐらいの課題が浮かんできます。今日はこれをひとつずつ説明しますと時間がかかりますので、だいたいこういうふうな課題を今までの教授学では扱っていたということをご理解いただけたらよいと思います。ひとつは「学力と人格の問題」と言われているものです。つまり、ある認識を形成するとき、それが本当に生きて働く形で形成するにはどうしたらいいか。また、そういうふうなモデルをどう作りだしていけばいいか。こういうことです。二つ目は、「共通とか必修と言われている問題と選択をするという問題」をどのように考えていけばいいかというような問題。三つ目は、「科学と生活の問題」と言われますけれども、いわゆる科学的な認識と生活的な認識といきましょうか、そういうものをどのように関係してとらえていけばいいかという問題です。四つ目は、「内容と方法の問題」と言われますけれども、どういう内容をどういう方法で教えていくかという問題。五つ目は、「個別化と協同化の問題」と言いますけれども、個別的に接近していくという方法と、協同的に接近していくという授業の方法がどのような効果をうみだしていくかという問題。さらに、以上を通じてということになるかもしれませんが、いわゆる授業における「技術化の問題と芸術化の問題」をどう考えていけばいいかという問題。このような問題を今までの教授学が探究してきた課題なのではないかと思えます。もちろん、それぞれの問題に対してはそれぞれの立場があり、そしてそれを全体として包括する立場があると考えていいと思いますが、基本的にはこういうふうな問題を考えていたと思っています。

そういうことを踏まえて、実際の授業では、授業の「単位」として四つの要素にわけて、授業をつくります。この四つの要素とは、「教育目標」「教材・教具」「教授行為・学習形態」「教育評価」です。そして、それぞれの要素に即した課題を明らかにしていくわけです。以上が、僕の考えている教授学の全体の構想です。

そこで、僕が実際に教育方法なり教授学の講義で、具体的にやっていることを紹介します。本日紹介するのは、講

義の最初のあたりに実施します学生に対する「学力テスト」です。このように「学力テスト」を行いますのは、まず学生に講義への参加を促すということがあります。しかしそれ以上に、先ほども申しましたように、現代の学生がどのような学力実態を持っているのかということ、とくに学力の構造について、学生自体がよりクリアに自覚できる素材を提供しようということです。さらには、それは学生、その学生というのは基本的に教員を目指している学生が多いわけですので、その教員を目指す学生が実際の子どもたちを目の前にした時に、今の子どもたちがどういう学力を持っているのかということを知ってもらいたいという意味もあり、いわば三重の意味でこの学力テストをやっています。全体として、非常にわかりやすい問題です。たぶん先生方は全部解けるといふふうに思います。

ちなみに、「①墾田永年私財法 ②三世一身法 ③荘園の成立 ④班田収授法について、古い順に並べよ」という問題を見て下さい。これは先生方であればすぐ解けるといふふうに思います。歴史の中で繰り返し勉強されたものです。しかし、ある教員養成系の大学で実施しましたら、半分以上解けないんですね。この問題は、解けるか解けないかということがあまり問題ではなくて、むしろ解いた子はどういうふうに解いたのか、解けなかった子は どうして解けなかったのかということを実は考えて欲しいという形で作られている問題です。この問題を、同じく京都大学の学生にもしてもらったんですね。そうしますと、京都大学の多くの学生は解けたんですね。その学生のひとりに、どういう方略で解いているかと聞きましたら、荘園の成立を除いて年代を全部覚えておりました。例のゴロあわせで覚えていたんですね。すばっと解きまして、まあ受験エリートの解き方です。しかし、古代の土地制度というものは基本的にはいわゆる「公」のものから「私」のものへ変わっていくんだという理解がありますと、この問題は解けるんですね。当然ひとつひとつの言葉をまったく知らないということになりますと、歯が立たないというところがあるんですけども、永年私財だとか、三世とか、班田収授という言葉がわかっていると、基本的には「公」から「私」へと変わっていったという、そういうふうな歴史の知識を構造化して歴史を理解していますと、年代を棒暗記しなくても、ある程度この問題を解けることができます。こういうところを学生といっしょに考えながら、それぞれの学生が持っている学力観をも問い直していくということをやっております。もし興味がございましたら、残りの問題も一度解いてみてください。蟻の足は何本かとか、三権分立の問題とか、手前味噌ですがなかなか面白い問題ではないかと思えます。

それでは、最後に次のことを申し上げたいと思います。以上のように教育方法や教授学というのは、基本的には小学校や中学校の授業研究の中からでてきたものではあるんですけども、これは僕も稲垣先生と同じなわけですが、実は大学の授業を考えるとこういう知見というものは、かなり重要な問題を提起しているのではないかと思えます。もちろん違うというご意見も多々あるとは承知しているんですが、実は先ほども言いましたように、教授学というのは、単に何かわかりにくいものをわかりやすくするというのではなく、そのことを通じて、実は文化そのものの営みを点検しているんだというふうに考えますと、大学の授業そのものにこれは大きく関わっているものだと考えますので、そういう意味ではこのような知見が、大学の教授法を改善するのにかなり役に立つのではないかと思えます。

しかし一方では、最近の大学教授法の本格的な研究、特に先ほども出てきましたけれども、田中毎実先生たちが書かれました『開かれた大学授業をめざして』（玉川大学）という本を読みまして、久しぶりに僕も興奮しました。小、中学校の実践記録をたくさん読みますけれども、それに劣らずというか、それ以上の迫力をもって授業を語っておられまして、ここに書かれております内容、これはもちろん毎実先生の教育学的知見が込められているんだろうとは思いますが、我々の教授学、従来の教授学とか、教育方法学に逆にインパクトを与えているなあと感じました。例えば、ここに少し引用しますと、「人間形成論を教えるこの授業そのものが人間形成論の部分である」というような言い方をされていたり、「この授業では、学生たちにミニマム・エッセンシャルズということがもしあるとすれば、一体何だろうか」というふうに問いかけてみたり、「授業者の思うようにコミットしない学生たちは、実は、授業構成を新しい次元に導くトリック・スターなのではないか」というような問題提起をされていて、我々教授学なり、教育方法学をやっている者にとりまして、目の覚めるような提案がたくさんなされております。そういう意味では大学授業の改善から得られた知見と教育方法学、教授学が積みあげてきたものと、それこそ相互交流しながら、今後様々なレベルですけれども、連帯していけるのではないかなと思っております。非常につたない話をいたしましたけれども、持ち時間がきましたのでこれで失礼いたします。